

## 取組実績の概要 【2ページ以内】

## 1 質の保証を伴った国際連携教育モデルの構築

本取組は、米国（Pratt Institute | ニューヨーク）・日本（慶應義塾大学 | 東京）・英国（Royal College of Art/Imperial College London | ロンドン）の3拠点4大学が協働して運営をする修士課程プログラム「グローバルイノベーションデザイン・プログラム（以下、GIDプログラム）」の構築と継続的な実施を目指し、達成した取組である。

GIDプログラムは、世界的にも大きな潮流となり始めているグローバルに活躍できる人材の育成を目的とし、とりわけデザイン分野に焦点をあて、国際的な視点に立って社会的ニーズを見つけ出し、イノベーションを提供できる国際的な人材「グローバルイノベーションデザイン・リーダー」の輩出を目的とした。その大きな特徴は、プログラムに参加した学生が、クリエイティブ産業の中心にある上記3都市を体感することに加え、拠点大学ごとに異なるデザインアプローチを身につけるといったものである。アート、デザイン、エンジニアリング、テクノロジー、ビジネスに独自の強みを持ち合わせている4大学が、ひとつの新しい修士課程を協働で形成したことで、多様性のある独自のカリキュラムを有するプログラムとなった。1大学では限界があるが、国際連携によって複数の大学で学生を育成する環境を整備することが重要であることが認識された。

GIDプログラムは、通常の交換留学とは一線を画し、慶應義塾大学メディアデザイン研究科(以下KMD)、Pratt Institute(以下Pratt)およびRoyal College of Art/Imperial College London (以下RCA/Imperial)の3拠点4大学が、あたかも新しい修士課程の構築をイメージしながら、ひとつのプログラムを計画・運営していった。各大学の教職員は、テレビ会議システムを通じて、教授会相当の運営会議を毎月開催し、カリキュラムの内容、成績管理や単位互換、プログラムの修了要件、学生の支援体制など多岐にわたり議論し、密度の濃いプログラムに仕上げた。特に、初期の段階で、関係教職員が本学に一同に会し、各大学の教育モデルの強みについて相互に理解し、本プログラムが育成する人材像を共有（以下「GID mission statement」の規定）できたことが、その後の詳細なプログラム設計の成功につながった。

GID mission statement: “To educate creative catalysts and leaders who will design new possibilities in the world through the synthesis of multinational perspectives and approaches”

本学においては、国際公募による外国人教員および国際経験の長い日本人教員を迎え、KMD研究科委員長および学生部職員とともにチームを組み、取組当初から毎週欠かさずミーティングをし、本プログラムの構築・実施に丁寧に取り組んできた。また、GIDプログラムが世界標準で認知されるために、外部評価を毎年実施した。委員には、東京大学教授で建築家の隈研吾氏、University College London教授 ジェレミー・ワトソン氏、デザインコンサルタント ゴードン・ブルース氏などデザイン分野およびマネジメント分野における世界的に一流の方を招き、大学と企業の連携に関する助言、将来の進むべき方向など、多岐にわたる示唆に富む具体的な意見をj得る仕組みを整え、提携大学の教職員とも共有し、プログラムの改善に生かした。

GIDプログラムの立ち上げを通じて、国際連携は各国の常識が異なるため困難も多く経験したが、教職員がチームとなり、多くの作業を丁寧に粘り強く実施したことが成功につながっていると認識している。なお、補助事業期間終了後を見据え、平成27年度中に大学の経常費を計上するとともに、GIDプログラムを含む国際的な活動に対し支援を得る仕組みとして「KMD国際連携活動コンソーシアム」を設立し、本プログラムの継続的な運営を支える体制を整えた。

## 2 リーダー育成のためのプログラムおよび支援体制

GIDプログラムは、全課程にわたり英語のみで実施され、修士課程学生を対象としたメインプログラムと、学部生を対象としたショートプログラムを有した。メインプログラムは補助事業期間終了後も継続的に実施しており、一方ショートプログラムは目標の達成をもって発展的に平成27年度で終了とした。

メインプログラムは、プレ・プログラムと称した短期交流活動を含め、平成27年度末までのべ140人の学生が参加をした。学生は所属大学で半年ないし1年間学んだ後、提携大学に各半年間（合計1年間）滞在をする。留学中の単位取得は、各大学で厳格に成績管理されたカリキュラムのもと実施され、帰国後に単位認定される。各学期の前後には提携大学間でカリキュラムを点検・評価をし、改善に努めている。全カリキュラムを修了すると、本学の学生の場合は、修士（メディアデザイン学）の学位に加え、3拠点4大学合同名義によるGIDサーティフィケートが授与される。サーティフィケートの審査会には外部評価委員を招き、到達目標の達成度を厳密に審査するとともに、今後の取り組みについて各学生に助言を与えている。カリキュラムの中心は、1年にわたり各拠点でのローカルな経験をグローバルな視点でまとめあげる「インターナショナルプロジェクト」で、3拠点に滞在する学生が全員で取り組む。時差のある拠点を結び共同で研究を進めていくことは困難を伴ったが、試行錯誤を経てプロジェクトは着実に成果を上げた。学生にとって異質の文化を知る体験には大きな収穫があ

り、英語力だけでなく、英語試験では測りきれない社会において求められる力、すなわち、イノベーション力、実行力、コミュニケーション力が大きく伸びる結果を伴った。遠隔地同士のコラボレーション力が今後は重要な課題となる、との外部審査委員の指摘を受け、意識して「インターナショナルプロジェクト」におけるニューヨーク、ロンドン、東京のGID学生間のコラボレーション活動を推進し、成果を実績として積み上げていった。GIDメインプログラムを修了した学生は、デザインやテクノロジーの分野での就職する者、起業する者、英国の大学院博士課程に進学する者、世界的に権威のある世界経済フォーラム(World Economic Forum)のGlobal Shaper(次世代のグローバルリーダー)に選出された者、Dubai Design Weekという展覧会の大学院生部門に採択された者、オーストリア・リンツで開催される世界的に有名なArs Electronicaという展覧会に招待される者などがおり、本プログラムで学んだイノベーションスキルやグローバルネットワークを生かし活躍をしている。また、3拠点の卒業生はSNS等のオンライン上で同窓生同士の交流が進んでいるという報告を受けている。

GIDショートプログラムは、本学および他大学の学部生を対象者とし、平成24～27年度に夏季に米国Prattにて4回実施し、計41人が参加した。学生は提携大学の教員が共同で提供する実践型の講座に参加することで、コミュニケーション能力の向上のみならず、デザインイノベーションの考え方を体験的に学ぶとともに、現地の学生と交流し国際的な文化差の理解や国際的感覚を養うことができた。参加学生は、KMDに進学をする者、GIDメインプログラムに参加する者、米国のMITメディアラボに進学しデザイン分野でのイノベーション創出のための活動を継続する者などが含まれ、ショートプログラムがその後の進路決定に影響を与えたことが認められた。

### 3 GIDプログラムの成果および他大学からの評価

GIDプログラムは、取組当初から海外も含めた情報発信を強く意識し、専門のマーケティングアドバイザーと協働し、ロゴマークの設定、パンフレットおよびウェブサイト作成などを行った。また、認知度向上およびグローバル化戦略の一例として国内外の他大学とも知見を共有することに努めた。補助事業期間に、シンポジウムの開催4回、ワークショップの開催4回、説明会24回、米国および国内における展覧会を計7回、報告書の発行4回のほか、ウェブサイトでの公開、オンラインストーリーミングを利用した配信等を積極的に行った。GIDプログラムの行事への参加者は、のべ約4,000人となった。5年間で認知度は向上し、KMD研究科の入学試験受験者数および入学希望者数は4割ほど増えるとともに、KMDの留学生率は、平成23年度の約30%から補助事業期間直後の平成28年度当初には約50%に増大した。

GIDプログラムで培ったプログラムマネジメント手法やリーダー育成のための教育手法などの教育モデルが国内外の他大学からも評価され、平成26年度に本学は米国・スタンフォード大学との2大学間提携プログラムを開始した。平成27年度には韓国・KAISTとの2大学間提携プログラムを立ち上げ、オランダ・デルフト工科大学、台湾・国立交通大学との連携準備のほか、ミャンマーやタイなどの東南アジアの大学から連携希望の話を受けるまでになった。以上のように、GIDプログラムはデザイン分野における国際的な教育モデルとして、日本の大学が世界のトップ校に教育効果を提唱し実証することに成果を上げた。今後の日本のデザイン教育におけるモデルを構築することができた。

【注記】計画時は、本学所属の外国人留学生(毎年5人)を「派遣」ではなく「受入」でカウントしていたが、実績数には、事業途中に示された定義に従い、その逆でカウントした。現在の定義で計画数を示すならば、合計数において派遣100人、受入60人である。

#### 【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	0人	0人	20人	5人	20人	25人	20人	25人	20人	25人	80人	80人
実績	4人	4人	21人	6人	26人	19人	27人	22人	34人	18人	112人	69人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。